

〈論 文〉

大正期『讀賣新聞』「よみうり婦人附録」 関係者の人物像にみる「身の上相談」欄成立過程

桑 原 桃 音

1. 問題設定

本稿の目的は、日本の新聞紙面において身の上相談欄が開設、定着した過程を、大正期『讀賣新聞』「身の上相談」欄担当者と、この欄が連載された「よみうり婦人附録」の編集者、記者の特徴を把握することで検討、考察していくことである（以下『讀賣新聞』は『讀賣』と略）。

身の上相談欄とは読者が自らの悩みを文章化して投稿し、記者や有識者によって編集されたその投稿文と、記者や有識者による回答文が共に掲載される投稿欄のことである。読者はこの欄での投稿と回答のやり取りを読み、他者の問題とその解決方法を知り、時には自分の問題にも当てはめて考えることもある。そのような意味で、身の上相談欄は人びとがどのような葛藤を抱いているのかという問題が構築される場であり、問題に対してどのような意識を持てばよいのか、どのように対処すべきなのか、どのような生き方が理想なのかを提示する言説空間だといえる⁽¹⁾。つまり、身の上相談欄は投稿と回答のやり取りを提示しながら、さまざまな規範を構築する公共性のあるメディアだといえる。

『讀賣』の身の上相談欄は結婚、家族にかかわる悩みを1914（大正3）年5月2日の連載開始から取り上げてきた。関東大震災後と太平洋戦争末期にいったん休載されるものの⁽²⁾、改題を重ね「人生案内」として現在も連載されている。

まず、身の上相談欄が新聞の連載欄として発展した経緯について先行研究を概観しよう。

読者が問題を投稿してメディアが解決を提示するような投稿欄は、既に明治初期に登場してい

た。池内一（1953）は、1880（明治13）年に創刊された慶応義塾系社交団体である交詢社の機関誌『交詢雑誌』の「問答」欄が身の上相談の原型であると指摘している。交詢社の「社定第一条」にある「社員タルモノ互ニ知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スル」に則るように、「問答」では海外事業、学理、経済事情、工業などの「知識」を得るための問答が読者間で行われていた。「問答」はそのほかの雑誌、新聞で踏襲されていった⁽³⁾（池内1953：9-10）。この「問答」は、自分の知らない知識を会ったことのない誰かと、活字メディアを通して共有するという身の上相談欄に通じる形式を確立したといえる。

明治末期になると、このような読者同士の「問答」ではなく、読者の問いに新聞記者が答える形式が登場する。その形式をとったのが1906（明治39）年に連載を開始した『都新聞』の「読者と記者」「相談の相談」である。山本武利によると「相談の相談」は「教育問題、家庭問題、健康衛生問題など真面目で多様な内容」だった。山本はこれらの欄における記者と読者のやり取りによって、「心情的なつながり」が可能な投稿欄が形成されていたと指摘する。『都新聞』（1915. 12. 3）への投書では「（投稿欄から：筆者補足）利益と歓喜と幸運とを勝ち得た人も亦誠に多いであろうと信じます。…略…実際、都新聞と其の読者との間には、他の新聞紙と其の読者との間には見られない一種の温かい情味が相通じ、相繋っている」と語られている（山本1981：249）。

1914（大正3）年に『讀賣』において、読者が結婚や家族について相談し、記者や有識者が回答を提示する身の上相談欄が登場、定着した。『讀

賣』「身の上相談」が登場するまで、結婚、家族の問題を主たる相談として長期連載できた新聞・雑誌の身の上相談欄はなかった⁽⁴⁾。したがって、身の上相談の成立過程を明らかにするには『讀賣』「身の上相談」が適しているといえる（以下では『讀賣』に掲載された「身の上相談」を指す際は「身の上相談」とし、身の上相談全般を論じる場合はカギカッコをつけない）。

鶴見俊輔は身の上相談が活字メディア上に出現した理由を当時の社会的状況に見いだしている。鶴見は、第一に、悩みを周囲に言えない状況があったこと、第二に、「商業新聞」としてのメディア側の経済的事情をあげている。第一の点についてみると、明治時代から第二次世界大戦が終わる頃までは、地方から上京した者も含め、都会在住の「未婚の娘が誰かとの親交をうわさされたというだけでも結婚にさしつかえ」る時代であったという（鶴見 1956: 25）。そのことを示すように、1886（明治 19）年『女学雑誌』「いへのとも」欄の新設の辞では、女性が友人など近くの人に語りにくい問いに答えるために欄を設けるという趣旨が記されている⁽⁵⁾。このように、女性が親密な問題を語りづらい状況があったことから、匿名性が守られた状態で見ず知らずの記者に語るができる身の上相談が出現したといえる。

第二の「商業新聞」の経済的事情ついてみると、鶴見は商業新聞にとって身の上相談は読者の興味のある「愛情の主題」を提示できる記事であり、「他の部分と同様に、商品になる読み物としてあつかわれている」からと指摘する（鶴見 1956: 11）。つまり、読者が持つ、「一身上」の問題の解決策を得たいという欲求と、他者の私密的空間への興味を充足させるべく登場した欄というのである。たしかに、多くの新聞史研究が指摘するように、日清戦争時は戦況速報を知りたい読者によって、日露戦争後は資本主義的な世相を背景に各新聞社の販売競争が激化したことによって、新聞の発行部数は急増した⁽⁶⁾。この販売競争のなかで、新聞は本格的に商業新聞化し、新聞各社は読者争奪や、獲得した読者を固定化して維持するための諸施策として読者の興味や欲求に合わせる新しい特色の發揮に勤めた。その特色のひとつ

として「読者本位」の紙面づくりが行われていた⁽⁷⁾（山本 1948, [1970] 1992; 竹村 2004）。相談欄の開設もこの「読者本位」の紙面づくりの一環であった。山本文雄によると、特に『報知新聞』が読者獲得策として職業案内、衛生顧問、法律顧問、家庭葉書便りなどの読者の相談欄を設け、この読者に目を向けた紙面づくりの結果、日露戦争後に東京で発行部数一番に達していた（山本 1948: 179, [1970] 1992: 91）。『報知新聞』の成功に追随するように、『都新聞』は「相談の相談」を、『東京日日新聞』は「家庭問答」を開設した。『讀賣』もこの時期に「よみうり婦人附録」が登場させ、この附録面において「身の上相談」欄を開設した。

それではなぜ、新聞、雑誌のような活字メディアは、語りづらいことを相談する場を設け、定着させることができたのか。個々の問題とその解決方法はそれぞれ異なる可能性や、その解決方法が正解かどうかわからないにもかかわらず、身の上相談のように、会ったことのない誰かの悩みの語りとそれへの答えのやりとりが掲載される投稿欄が読者に受け入れられたのだろうか。また、各紙が職業斡旋や知識共有のための相談欄を開設するなかで、なぜ『讀賣』「身の上相談」は「愛情を主題」にし、読者が恋愛、結婚、家族にかかわる経験や心情を赤裸々に語るができる欄として成立、定着させることができたのだろうか。

その一端を探るべく、本稿では、大正期の『讀賣』「身の上相談」担当者と、この欄が掲載されていた「よみうり婦人附録」の編集者、記者の特徴を以下の手順で明らかにしていく。2. では、「身の上相談」とこの相談欄が掲載されていた「よみうり婦人附録」の成立過程について概観する。この概観を通して「よみうり婦人附録」関係者を明らかにする意義を述べる。3. では、「身の上相談」担当記者を含めた「よみうり婦人附録」の関係者を取り上げる。最後に結論では、関係者の特徴をまとめながら、その特徴と「身の上相談」の成立過程との関連を考察する。

2. 資料と方法

——大正期『讀賣新聞』「身の上相談」

2.1 「よみうり婦人附録」

それでは、まず、「身の上相談」が連載されていた「よみうり婦人附録」の開設経緯から「身の上相談」の成立過程をたどっていこう。

1914（大正3）年4月、新聞各社の商業競争が激化するなか、当時『讀賣』主筆（今でいう編集長）であった五來欣造によって婦人雑誌や婦人のための便利帳を兼ねた内容をもった「よみうり婦人附録」⁽⁸⁾が開設された（1919年9月に「よみうり婦人欄」と改称、以下「婦人附録」と略）。当時、明治期に人気を博していた『讀賣』であったが、日露戦争後は売上げが減少していた⁽⁹⁾（山本〔1970〕1992：93）。また、読売新聞社史によると、同時期に五來は『讀賣』から「政治色を払拭する」必要性に迫っていた⁽¹⁰⁾。五來は経営の苦境を脱して部数を伸ばすために、また「政治」離れのために、日本ではじめて新聞の1ページ全面を「女性向け」に編集した「婦人附録」を開設した。フランス留学の経験がある五來は、当時のフランスで相当の部数と婦人読者を有していた新聞『フィガロ』の婦人欄を目にしており、それを参考に「婦人附録」を編集した（読売新聞100年史編纂委員会1976：251-252；読売新聞社1994：92-93）。五來は「政治色を払拭する」という政治のために「非政治的」と位置づけた「家庭」、「教育」、「文学」、「女性」を全面に出した編集方針に切り替えたのである⁽¹¹⁾。

次の「婦人附録」の開設理念からも「身の上相談」が開設された理由が読み取れる。

われわれは妄に今の婦人を謳歌する積もりでない。古い思想に媚びる積は尚更ない。一言にしていうなら、どうかして、今の婦人をモット幸福にしたい。家庭も社会も、それによって、どんなに明るくなるであろう。…略…今の婦人の前に提出された大小の問題は数限りなくある。めいめいの前に投げられた問題の意味を十分に了解し、処置しつつ進んでいくことの出来る婦人は幸福である。そうして、そういう婦人

を持っている社会もまた真に幸福である。われわれは日々に取り来る、今の社会の出来事を捉えて来たって、婦人と家庭の実際生活に於ける幾多の問題に対する真実で間違いのない解決の好適例を示したい。よみうり婦人附録の使命は、たしかにこれである。

（『婦人と時勢』『讀賣』1914. 4. 3）

この記事から女性読者の「幸福」のために「問題」への「解決策」や「適例」を示そうとする「読者本位」の姿勢が読み取れる。またこの姿勢が「身の上相談」の開設の理由にもつながっていると見える⁽¹²⁾。次の2.2でみるように、商業紙『讀賣』にとって、「身の上相談」の連載開始も「読者本位」の姿勢を打ち出して新聞各社と競合するための施策であったことがわかる。

2.2 「身の上相談」

2.2.1 開設と展開

ここでは、「身の上相談」の概要をみながら本稿の目的のために『讀賣』「身の上相談」を扱う意義、「婦人附録」の関係者に焦点をあてる意義を述べる。

「身の上相談」は1914（大正3）年5月の連載開始から1923（大正12）年の関東大震災まで、多くの相談を獲得、掲載することに成功した。たとえば、開設約1年後に「身の上相談」欄の連載を振り返った記事には、担当記者宛に男女関係なく1日30～60通の手紙が送付されていたこと、来社による面談も毎日5～15人ほどだったことが記されている（1915. 4. 3）⁽¹³⁾。桑原によると大正期の「身の上相談」の掲載件数は1914年が512件、1916年が340件、1918年が322件、1920年が371件、1922年は69件であった⁽¹⁴⁾（桑原2013a：77）。斎藤美穂（1996）が分析した婦人雑誌における相談欄の連載期間と件数は『婦人週報』「身の上相談」が3ヶ月で15件、『婦人の友』「悩める友へ」が6年で96件である。この件数と比較すると、「身の上相談」は連載期間が長く、件数が多いことがわかる⁽¹⁵⁾。

次の1914（大正3）年4月に掲載された投稿募集記事から、「身の上相談」が性別にこだわらず

に、「結婚、離婚、家庭」の悩みを何でも扱うとして開設されたことが読み取れる。

五月一日から「身の上相談」を此紙上に設け、一身上の出来事、例えば結婚、離婚、家庭の煩い等、及び精神上の煩悶、婦人の職業問題につき、男女に係らず、凡て思案余った事の御相談相手となり、及ぶ限りの力を致し度いと存じます、御相談は手紙で御申し越し下さってもよろしく御面談を望まれる方は、日曜日を除き毎日午後四時より六時迄に、本社をお尋ね下されば、喜んでお目にかかります。秘密を守るべき事につき、責任を負うのはもとよりで御座います。手紙の節も、来社の節も、特に人事の相談係と名指しを願います。

(「社告」『讀賣』1914. 4. 26)

「凡て思案余った事の御相談」とすることで、『報知新聞』が投書内容によって各相談欄を設けているのに対し、包括的な相談欄であることが示されている。この募集記事が、「一身上の出来事、例えば結婚、離婚、家庭の煩い等」と明示していること、「面談」も含むこと、「秘密を守る」ことが約束されていることで、他紙と比較して結婚、家庭の相談が集まりやすかったのだろう。

以上のことから、本稿では「身の上相談」をわれわれが自明とするような結婚、家族に関する悩みを扱う相談欄の形式を発展、定着させたと位置付けている。それではなぜ、『讀賣』は「結婚、離婚、家庭の煩い」の相談を引き受けると明示したのか、他紙と比べ長期連載、掲載件数を多くすることができたのか。それらを可能にした「身の上相談」関係者はいかなる人物だったのか。

2.2.2 読者と投稿者

ここでは、大正期「身の上相談」の長期連載と多くの掲載件数を可能にした人びととして『讀賣』の読者と投稿者について簡単にふれる。

大正期に『讀賣』は幅広い社会層に拡がりつつあったと予想される。明治期に比べ大正期には最低限のリテラシーを有する比率は格段に高くなっていた⁽¹⁶⁾。木村涼子と永嶺重敏によると、明治末期から大正期にかけて、活字メディアを読もう

／読まそうとする社会状況があった⁽¹⁷⁾。そのため「都市部の中産知識人層」だけでなく、新聞や雑誌などの活字メディアが労働者・農民層、児童、女性、地方に住む人々にも読まれるようになっていた(木村 2010; 永嶺 1997, 2004)。創刊当初の『讀賣』も広い大衆を対象にする趣旨から、リテラシー能力の低い読者にも読めるようすべての漢字にフリガナを入れ、記事全文にわかりやすい通俗語を用いて編集されていた⁽¹⁸⁾。

しかしながら、1. で述べたように当時の発行部数から『讀賣』は多くの人びとには読まれていなかったといえる。また、大正期の新聞読者調査をまとめた山本によると、「センセーショナルな三面記事と身近な家庭記事、ラジオ番組」などで家庭婦人、職業婦人に人気があったが、その「大衆的な家庭新聞」イメージから青年団の購読新聞に選ばれていなかった(山本 1981: 225-234, 240-243)。

つぎに、大正期の「身の上相談」投稿者について述べる。桑原(2013 a)によると悩みが掲載された投稿者は各属性で不明が多く、年齢は「20代」に集中していること、職業は「学生」、「雇用ホワイト」が多く、「農業」が少ないこと、学歴は「中等教育」が多い⁽¹⁹⁾。性別と居住地は偏りがなかったことがわかるが、面談はあったものの、投稿することが可能なりテラシーを確実に有していた層への偏りがあったことがわかる(桑原 2013 a: 77)。

2.3 「婦人附録」関係者と分析方法

ここでは、「身の上相談」という活字メディアがどのような社会的空間によって醸成されていたのかについて、発信者側である「身の上相談」担当者と「婦人附録」関係者についてみていく意義と分析方法について説明する。

本稿で「婦人附録」の関係者を取り上げるのは、第一に、読売新聞社史(以下「社史」と略)で取り上げられている「婦人附録」関係者のなかにも「身の上相談」の担当記者がいた可能性があること、第二に、「身の上相談」担当記者が不在である場合は担当記者以外の「婦人附録」記者たちが穴埋めしていた可能性があること、第三

に、「身の上相談」の開設と連載は「婦人附録」という場のあり方や編集方針があって可能となったといえるからである。

社史をみると、「身の上相談」担当者として女流作家の水野仙子と歌人の窪田空穂が、水野の前に大月隆仗があげられている。担当者はすべて目を通した相談の手紙や面談内容のなかから「一般性の高いもの、興味深いものを選んで」、質問内容を掲載しやすいように編集し、その相談への回答を記していたという（読賣新聞社 1955：221；読売新聞社 100 年史編集委員会 1976：254-255）。

しかしながら、水野と窪田以外にも「婦人附録」の記者たちが「身の上相談」にかかわっていたといえる。水野は窪田以前の 1915（大正 4）年頃を担当していたことが推測される。臼井和恵によると、窪田の担当は 1916（大正 5）年 10 月 11 日から 1917（大正 6）年 5 月 23 日までであり、窪田の担当期間であっても、窪田が不在の時は婦人部記者たちで穴埋めしていた経緯がある（臼井 2006：16, 417, 487-502）。窪田の担当期間以降も、水野と窪田の担当期間の間にある空白期間にも「身の上相談」は連載されていた。「身の上相談」には回答者の記名はなく「記者」としか記載されておらず、実際に誰がどの時期に担当していたか記事からは判別できない。

それでは、窪田ら以外の誰がその空白期間を埋めていたのだろうか。社史には「身の上相談」担当記者以外に「婦人附録」関係者として、先述した「婦人附録」開設者の五來、編集顧問の羽仁吉一、編集主任の小橋三四子、開設時に入社した与謝野晶子、田村俊子、松本雲舟、婦人部長の前田晃などが記載されている。その他にも婦人部記者として柳（橋本）八重、野坂貞子、恩田和子、下妻つま子、佛子寿満子、西崎花世、望月百合子、保高德蔵、松村英一が活躍したと記されている。社史の年表に目をやると、1919（大正 8）年に安成二郎が婦人部長に任命されている（読賣新聞社 1955：220-221, 1994：93；読売新聞 100 年史編算委員会 1976：241, 253-255）。しかしながら、社史だけでは婦人部関係者の誰がどのような役割だったのか不明な点が多い。

また、社史という制約上、彼らがどのような人

物であったかは記述されていない。そのため「身の上相談」という活字メディアがどのような社会的空間によって醸成されていったのかがわからない。

「身の上相談」のその他の担当者を検証するために、また、この欄を醸成した社会的空間がいかなるものかを考察するために、『読賣』婦人部全体の雰囲気と人物像を明らかにする。そのために、本稿では社史に名前の挙がっているこれらの「婦人附録」関係者の関連文献を分析資料とする。

この関連文献の探索方法は次の通りである。第一に、人物情報データベース「日外 Web サービス WHOPLUS」から社史で判明した「婦人附録」関係者を検索し、その結果、提示された参考文献や人物事典を確認する。第二に、それらの文献や事典に列挙されている参考文献などを収集する。第三に、読売新聞記事探索データベース「ヨミダス歴史館」に関係者の名前を検索して得られた記事も収集する。第四に、戦前発行の『新聞人名辞典』も参考にする。これらの資料から、社史が示した他に「婦人附録」関係者がいたのか、彼らの在社期間、「婦人附録」での担当、人物像として読賣新聞社在社時のエピソード、入社前後の経歴、さらに「身の上相談」を主に担当していた記者と担当期間などを調査した。

3. 分析結果

3.1 『読賣』「婦人附録」関係者

分析の結果、新たに「婦人附録」関係者として石島菊枝、三大寺本紹、周田松枝、山口たかこ、百瀬しづ子らが、また水野、窪田以外に「身の上相談」を主に担当していたのは、小橋、松本、三大寺であったことが判明した⁽²⁰⁾。表 1 は調査結果、誰がどの時期を担当していたのかを示したものである。小橋と松本は交代で「身の上相談」開始の 1914 年 5 月 2 日からしばらく担当していた（中村 1989：343, 350）。水野以前までを担当した大月は正確な開始時期はわからなかった。水野は 1915 年 9 月から 1916 年 3 月までを（尾形 1986：14）、窪田は 1916 年 10 月 11 日から 1917 年 5 月 23 日までを担当した（臼井 2006：16, 417）。松本は再入社した 1918 年 11 月から退社する 1919

表1 「身の上相談」担当記者の担当期間

1914年	1915年	1916年	1917年	1918年	1919年	1920年	1921年	1922年	1923年
小橋三四子 (1914.5-1915?)		水野仙子 (1915.9-1916.3)		三大寺本紹 (1919.8?-1921?)					
松本雲舟 (1914.5-1915?)		大月隆仗 (水野仙子の前)		窪田空穂 (1916.10-1917.5)		松本雲舟(再入社) (1918.11-1919.8?)			
小橋と松本とで交代で担当									
「身の上相談」連載から休載まで(1914.5-1923.8) 婦人部記者が交代で担当者休み、担当者不在期間を穴埋めしたと推察される。									
【凡例】 期間判明 予測される担当期間 終了時期のみ予測									

表2 「婦人附録」関係者一覧(「身の上相談」担当者は網掛けで表示)⁽²²⁾

氏名(旧姓)	生没年	在社期間 入社年. 月-退社年. 月	出生地 (現県名)	最終学歴 (年は判明した者のみ明記)
五來欣造	1875-1944	1914-1915	茨城県	1903年 帝都大学仏文科卒
小橋三四子	1883-1922	1914-1915. 10	静岡県	日本女子大学国文学部卒
松本雲舟	1882-1948	①1914. 3-1915. 9 ②1918. 11-1919. 夏頃	神奈川県	早稲田大学卒
羽仁吉一	1880-1955	1914-1915?	山口県	1893年 漢学塾, 周陽学舎を中退
田村俊子	1884-1945	1914-1923	東京都	1901年 日本女子大学国文科中退
与謝野(鳳)晶子	1878-1942	1914-1916?	大阪府	1894年 堺女学校卒業, 補習科
恩田和子	1893-1973	1914?-1917	茨城県	1913年 日本女子大学
下妻つま子	生没年不詳	1914 or 15-1917?	不明	不明
周田松枝	生没年不詳	1914-1926?	東京都	神奈川県立高等女学校補習科
柳(橋本)八重	1883-1972	1914-1916	東京都	1910年 日本女子大学校研究科生
大月隆仗	1883-1971	?-1915. 10	岡山県	哲学館(現・東洋大学) 哲学科
前田晃	1879-1961	1915. 10-1917. 5	山梨県	1904年 早稲田大学哲学科, 英文科
水野仙子	1888-1919	1915. 10-1916. 3	福島県	1904年 須賀川裁縫専修学校
生田(西崎)花世	1888-1970	1915年秋から約半年間	徳島県	徳島高等女学校
野坂貞子	生没年不詳	1915. 2-1915. 10-?	不明	不明
保高德蔵	1889-1971	1915-1917	大阪府	1915年 早稲田大学英文科
窪田空穂	1877-1967	1916. 10-1917. 5	長野県	1904年 早稲田大学
佛子須磨子	1885-1969	1916. 5-1916. 10	大阪府	堂島高等女学校
松村英一	1889-1981	1917年の半年ほど	東京都	愛知県厚熱田尋常高等小学校退学
百瀬しづ子	1890-????	1917(1919年夏は在社)-?	長野県	1909年 女子美術学校
石島(菅野)菊枝	1899-1975	1918-1925	東京都	会津高等女学校卒
安成二郎	1886-1974	1919-1927	秋田県	秋田県立大館中学校中退
三大寺本紹	1876-1932	1914-1930 1919頃に婦人部移動	佐賀県	哲学館(現・東洋大学) 関西法律学校
望月百合子	1900-2001	1919. 6-1921. 3	山梨県	1919年 私立成女高等女学校
山口たかこ	生没年不詳	1919年夏頃は在任	不明	女子英学塾(現・津田塾大学)

「身の上相談」担当者

年8月頃までを担当した（佐々木1991：126；江刺1997：264）。正確な時期は分からないが、三大寺は、松本と重なる時期もあるが、1919年夏頃⁽²¹⁾から1921年に宗教記者になるまで担当していたと推察される（江刺1997：262；永代[1927]1988：126，[1930]1988：415）。

表2は調査の結果判明した人物も含めて「婦人附録」関係者の生没年、在社期間、出身地、学歴をまとめたものである。表2から彼らの出身地は、北は秋田県、南は佐賀県と広範であるが、その多くは関東地方出身（10名）であることがわかる。学歴は高学歴の傾向があり、男性記者は早稲田大学が目立ち、女性記者は日本女子大学出身者に偏っている。讀賣新聞社だけでなく、新聞記者名鑑を調査した河崎によると、早稲田出身の記者が比較的多いのは当時の傾向であったようである（河崎2006：60-62）。一方、当時の女性記者は、女性で「文章をつづれる」能力をもっていた高等女学校や、女子大学の出身者で学校時代文芸好きだった才媛が採用されていたという⁽²²⁾（紅蓮洞1913「都下の女記者」『中央公論』7月号）。

また、関係者の回想から1915～1917年頃の婦人部記者の月給はおおよそ24円（電車の回数券月2冊、外勤手当が5円、大卒の初任給平均18円）だったという。1916年に在社した窪田の給与は45円であった。1918～1925年在籍した石島の回想では給与の面で女性記者が月給75円と男性記者（低くて45円くらい）よりも優遇されていたため男性記者にねたまれたと回想している。婦人部記者は衣装、人力車代がかかるため社からの手当があったという。石島と同時期に在社した望月によると月給は30円で大卒男性の月給50、60円には及ばなかったとする（『読売』1961.10.4朝刊9面；2009.4.1朝刊23面；植村2005；臼井2006：13-16）。望月は人力車を拒否していたことから手当を差し引けば女性記者の給与は30円ほどだったと推察される。

資料から、大正期頃の「婦人附録」担当部署（後の婦人部）は小橋、松本が主任を務めた開設当初（1914.3-1915.10）、前田婦人部長期（1915.10-1917.5）、松本婦人部長期（1918.11-1919夏頃）、安成婦人部長期（1919.10-1927）に分けら

れることがわかった。次の3.2では、短い松本期を安成婦人部長期に含めて3区分した期間の「婦人附録」編集現場、後の婦人部署内がどのような空間であったのかをみていく。

3.2 「婦人附録」編集現場の諸相

3.2.1 開設当初-1913～1914年

「婦人附録」開設当初の顧問・監督の存在であったのが五來欣造と羽仁吉一である。社史によると、五來は当時の『讀賣』社主本野一郎（1862-1918）と古くから親交があったことから、1904（明治37）年に本野の斡旋によって讀賣新聞社特別通信員の肩書で仏と独に留学した。その後、本野から委託され、留学先から急きよ帰国して「婦人附録」を開設した（読売新聞100年史編集委員会1976：251-252）。その時に婦人雑誌の編集に詳しいことから編集顧問として招かれたのが羽仁である。羽仁は最初、「相談に乗るくらいは乗ってもいい」ということで引き受けたが、いざ担当してみると毎日出社することになったため小橋と松本を推薦した。その後、自分がいなくてもやっていけると判断し、1年くらいで手を引いたとある（『讀賣』1932.10.22.9面）。「婦人附録」の開設の援護のために田村と与謝野が讀賣新聞社に入社する。彼女らは婦人部記者というよりも寄稿家という扱いだったようだ。

羽仁の推薦を受けた小橋と松本は、「婦人附録」の社説である「婦人と時勢」を交代で執筆していた。小橋は使命感を持って女性問題の紙面づくりにあたったといわれている。小橋が編集主任のときは松本が「身の上相談」の主任を務めていた。小橋と松本は「身の上相談」を独立のジャンルとして確立した（江刺1997：306；中村1989：335-362；山口ほか編2001：141）。松本は紙面を埋めるだけの記事を書くために深夜1時か2時ごろ家に帰り、朝の8時には出勤していた。紙面で松本は慈善活動の大切さを説き、「婦人は社会的適応力を養い職業に従事せよ」と訴えた。「人格者の松本が書いている」という理由で『讀賣』を購読する女性が多かったという（『読売』2009.4.8朝刊15面；江刺1997：262-268）。

松本と小橋が編集主任であった後半頃から水野

の前まで「身の上相談」を担当していたのが大月である。大月は「身の上相談」の担当について「退屈で大変」と回想している（青野 1959：222-226）。退社後の1920（大正9）年に大月はこの頃扱った「身の上相談」をもとに、大月高陽の筆名で『婦人の煩悶——深刻なる人間苦の研究と解決』（日本社）を著していることから、「身の上相談」の内容の重要性を意識していたようだ。

開設当初頃、「婦人附録」記者をしていたのが周田松枝、恩田和子、下妻つま子⁽²⁴⁾、柳八重である。1919（大正8）年に入社した望月が周田のことを「ベテランで堅実な人」と回想していることから、周田は長期にわたって記者をしていたことがわかる。周田は記者生活のかたわら婦選獲得同盟で婦選運動にかかっていた（江刺 1997：202, 306）。日本女子大卒業後すぐに入社したとされる恩田は飛行機研究家の尾崎行輝の飛行機に同乗した体験記を掲載している（『讀賣』1915. 8. 14, 4面）。柳は羽仁の勧めで讀賣新聞に入社するが、1916（大正5）年次女出産後、体調をくずし退社した（柳敬助・八重夫妻展 1996：40-46）。

3.2.2 前田晃部長時代——1915～1917年

1915（大正4）年10月、当時の編集局長上司^{かみつかさ}小剣^{しょうけん}の推薦で前田晃がやってきた。前田が来る頃に五來、松本、小橋が退社しているためその後任であったのだろう。前田の代で「編集主任」という肩書が「婦人部長」に代わる。前田は日々起こるニュースをそのまま話題として「婦人附録」にとりあげ、そこに婦人部記者や識者、著名婦人たちの意見をそえるなどして紙面を刷新していった（読売新聞100年史編集委員会 1976：234-255）。

この前田部長期から「身の上相談」の相談記事は1件の相談とそれへの回答の文面を多く取るようになっていた。この頃の「身の上相談」担当者は水野と窪田である。資料によると、前田は上司に「その頃すでに作家として相当知られていた」水野も一緒に入社することを条件として入社していた。同時期に婦人部記者をしていた生田によると、相談をする「婦人たち」はとても書いて相談することができずに、面談に訪れていた。水野はその話を聞いて質問部分の記事をつくり、回答を

つけて身の上相談欄の今の型のものをつくりあげた。水野の回答が評判であるため理事の石黒敬文も水野を大事にしたという（『讀賣』1932. 10. 22, 9面；『読売』1961. 10. 4朝刊9面）。水野の回答は真面目で熱心であり、常識的だが説得力があったという（尾形 1986）。しかし、半年後に水野は肋膜炎にかかり、結核を発病して入院、完治しないため退社している（武田 1995）。

1916（大正3）年10月に前田は水野の後任として親友の窪田を入社させる（臼井 2006：13-16）。窪田の日記には「身の上相談」は実際にやってみると楽ではなかったと記されている。翌年5月、社主本野夫人の久子から「身の上相談」が貞操問題ばかりで「読みに忍びざる」という苦情があった。その苦情を受けた幹部が前田に注意し、前田が窪田に伝えた。久子が幹部に書かせた手紙への返答として窪田が書いた内容の趣旨は「身の上相談は、相談に対して有益な回答をするもので、教育者としての自分の意見を吐くのが目的ではない」、「婦人が記者に相談してくる問題は、人に語れないような心の秘密である。この多くは男女問題に関するものだ。身の上相談はこれを排することはできない」というものだった。前田は、このような「社のごたごた」のために辞表をだし、社内の上層部の意見に対し憤慨していた窪田もその4日後に辞表をだした（臼井 2006：409-418；『読売』2009. 4. 17朝刊15面）。

それでは、前田時代の婦人部記者についてみる。親しくしていた水野から婦人部記者として推薦されてやってきたのが生田花世である。記者への憧れと、夫生田春月との生活が困窮していたことから入社を承諾した。春月に相談するも「好きにしたらいいだろう」という返事だった（戸田 1986：61-62）。生田の担当は主にストライキのあった市電車掌の取材、有名婦人家庭訪問、物価調査等であった。孝行娘取材では浅草の映画館の案内娘が「特別な孝行はしてません」と言い張って仕事にならなかったという。生田は当時を振り返り「のんびりしていた」と回想している。春月が不機嫌であるのを見かねて生田は記者をやめている（『読売』1961. 10. 4朝刊9面；2009. 4. 10朝刊25面）。同じく婦人部記者の佛子須磨子の回

想からも当時の状況がうかがえる。佛子の夫は作家直木三十五である。直木は不首尾から婦人部に不採用になった。直木たちは生活が困窮していたため、直木の代わりに佛子が記者として就職することとなった。昼になると直木が授乳のため新聞社まで子どもを抱えてやってきた。その時は上司が早退を許してくれたという。しかし、佛子は冬物の着物を全部質屋に入れたため、秋になると来ていく服がなくなり退社した（植村 2005）。

1914（大正3）年1月に社告で婦人部記者が募集され、原稿作成と面接の試験を経て150人中から野坂貞子と保高德蔵は選ばれて翌年入社した。野坂は婦人部記者期の活躍、入社前後の経歴が不明である。松村英一は臨時雇いとして入社していた。松村と保高は1917（大正6）年6月に窪田、前田と共に退社している（臼井 2006：367-418）。

3.2.3 安成二郎部長時代以降——1918年末以降

1919（大正8）年8月末に讀賣新聞社社長の本野英吉郎が死去した。次期社長に秋山忠三郎が就任したのに伴い、幹部社員は刷新された。1918（大正7）年に再入社していた松本婦人部長はこの時に退社し、安成二郎が婦人部長となる（江刺 1997：262-265）。安成部長期前の1919（大正8）年6月頃には三大寺本紹が「身の上相談」を専任で担当していた。三大寺は1914（大正3）年に讀賣新聞記者となり、社会部から婦人部に移り、身の上相談係りとなった（永代 [1930] 1988：415；永代 [1927] 1988：126）。

安成部長期には石島菊枝、望月百合子、山口たかこが婦人部記者として活躍していたことが判明した。有名婦人訪問を担当していた石島は、女子教育の振興時代であったこともあり、下田歌子などの婦人教育家を取材していた。1925（大正14）年に同僚の石島徳次郎と結婚して退職する（『読売』1961. 10. 4朝刊9面）。望月は卒業した成女女学校校長の宮田修からの紹介で入社した。望月の担当は「名流夫人訪問」、教育者訪問で、取材のための人力車を拒否して断髪洋装姿で取材をしていた。実際は男性記者の命ずることに黙って従い、話を取ってきて原稿を書けばいい、それが女性記者の仕事だったようだ。山口については望月が「津田塾を出ていて、しっかりした大変しとや

かなお嬢さん」という印象を受けたと回想している（江刺 1997：262-268）。前田部長期に入社していた百瀬しづ子は、婦人部記者として1919（大正8）年9月から2か月間、朝鮮・中国特派員として取材し、現地での見聞記を24本連載した。記事の中では家にこもって、中国人とつきあおうとしない現地の日本人女性を批判し、「女は子どもの守りをして、台所の番さえしていればよいという思想」が原因だと書いている（『読売』2009. 4. 30朝刊15面）。

3.3 「婦人附録」関係者の特徴

以上に述べた「婦人附録」関係者の婦人部担当前後の略歴をまとめたのが表3である。表3からみる関係者の特徴は、第一に、明治期、大正期の活字ジャーナリズムの編集にかかわっていた人びとが多いことである。たとえば、開設当初の関係者である羽仁は報知新聞に在社し、「家庭之友」の創刊にかかわり、小橋は日本女子大学同窓会誌をはじめ、キリスト教系婦人雑誌『新女界』などの編集に参加しており、松本はキリスト教系雑誌『羊門』を発刊後、東京毎日新聞社に入社していた。前田は『文章世界』の名編集者とうたわれていたという。また、恩田、大月、周田などのように別の新聞社の記者になるもの、小橋、保高、柳、前田などのように退社後も雑誌を発刊するものもある。彼らは「婦人附録」を立脚点として活字ジャーナリズムにかかわっていったのだ。

関係者の第二の特徴はキリスト教信仰である。羽仁、「身の上相談」を担当していた小橋、松本、窪田らはキリスト教信者であった。この点に関連して、社史では、「婦人附録」の開設当初、小橋、松本の影響によりキリスト教婦人団体である矯風会の会報じみたところがあったと説明されている（讀賣新聞社 1955：221）。ただし、キリスト教の理念を掲載するというよりも、あくまで矯風会の動向の記述にとどまっている⁽²⁵⁾。

彼らの個人史から、松本や窪田がキリスト教は高尚な知識を養い、人生の解明に役立つものだと思なしていることがわかる⁽²⁶⁾。また、小橋は『新女界』（1914年6巻11号）でキリスト教の理念を持って「身の上相談」を担当していたと述べ

表3 「婦人附録」関係者の担当とその略歴

氏名 (山姓)	「婦人附録」 での担当	婦人面担当以前の略歴	婦人面担当後の略歴	出典
五来欣造	主筆、「婦人附録」創設者	1903年に当時の「讀賣」主筆の中井錦城に認められ、「東西両京大学」を「讀賣」紙上に執筆。翌年、読売新聞社「特別通信員」として護送する。同時に読売新聞社社長の本野の支援により、在仏中は東洋語学校の日本語教授兼ソルボンヌ大学生として過ごした。パリからベルリンに移り政治学を学んだ。	1915年の退社後、早稲田大学教授となり、早大新聞科創設と共にその主任となる。明治大学講師となり、昭和期の政治学者と銘打たれ、日本におけるファシズム研究の第一人者といわれ、1939年「読説本」を刊行して青少年の思想国防隊の編成を提唱した。	(読売新聞 100年史編集委員会 1976: 251-253、「五来欣造」日外ウェブ)
小橋三四子	編集主任 「身の上相談」	小橋は日本女子大在学中に来日した世界矯風会本部のミス・スマートの講演に感銘を受け、矯風会に入会し、熱心な活動家になり、受洗(洗礼を受けたが時期や誰からかは不明)。柳と共に母校の同人誌「女子大学週報」、同窓会の機関紙「家庭週報」、「家庭」の編集、執筆を経て、日本YWCAの機関誌「明治の女子」、キリスト教婦人雑誌「新女界」の編集に参加。	1915~19年まで「婦人週報」の発行兼編集人をつとめた。記者倶楽部づくりに努め、日本基督教婦人矯風会の公祖全廃運動に参加。1919年に内務省の嘱託を受け、米田コロンビア大学に留学。1921年に帰国し、主婦之友社に入社、文化事業部主任となる。「サンガー婦人会見記」を書くが、直後に心臓麻痺によって38歳の若さで急逝した。	(江刺 1997: 251、306; 中村 1989: 335-362)
松本雲舟	編集主任 「身の上相談」 再入社: 婦人部長 「身の上相談」	東京毎日新聞、新橋教文館、趣味之婦人などに勤務し、編集に従事する傍ら、宗教学の著作、翻訳を発表。1899年17歳の時海老名正から洗礼を受けている。その後、植村正久の教えを受け、内村鑑三の著書から多大の感化を得たという。そして生涯変わらぬ敬虔なキリスト教徒となった。1902年2月にキリスト主義に基づき、「真理を鼓吹し、光明を發揚し、読者をして交渉する知識を養い」社会を覚醒する目的で、雑誌「羊門」を発刊した。	読売新聞を退社後の1915年には小橋とともに「婦人週報」を創刊。また、昭和女子大の創設者の一人になった。編集者、翻訳家。晩年は真鶴町長を務めた。シェンケ-ヴィッチ「何処に行く」(上・下、1907、1908)は「クウヴァディス」の最初の翻訳として著名。他にメレジコフスキー「神々の死」(1911)、パンヤンの「聖戦」(1911)などの翻訳がある。	(佐々木 1991: 119-170)
羽仁吉一	編集顧問	1897年に上京して、1900年に報知新聞社に入社。翌年日本初の婦人記者・羽仁もと子と結婚。1903年に夫婦協力して「家庭之友」(現「婦人之友」)を創刊。1908年婦人之友社を設立。社主として経営、編集に携わった。1914年に「子供之友」を創刊。	1919年に植村正久より受洗。1921年に自由学園を創立したほか、卒業生および婦人之友読者の協力組織である「友の会」による生活文化運動を通じて生涯教育、社会教育の分野でも先駆的役割を果たした。著書に「雑司ヶ谷雑記」(全2巻、1956)がある。	(自由学人 羽仁吉一編集委員会 2006: 427-429; 太田 1979: 626)
田村俊子	「婦人附録」創設の援護のために入社。 寄稿家	1902年日本女子大学で中退後、小説家を志して幸田露伴に入門。1910年に「あきらめ」が大坂朝日新聞の懸賞小説に二等当選し、以後作家となる。1911年「青鞥」創刊号に「生血」を発表し、賛助員となる。1913年には「新潮」で特集が組まれるなど、「讀賣」入社前には既に作家として認められ、自伝的な要素を含んだ作品を書き継ぎ、その全盛期にあった。代表作「木乃伊の口紅」は自らの夫婦生活とその内面の葛藤を大胆に暴露した私小説である。	1918年「破壊した後」の発表後、カナダのバンクーバーに行き「大陸日報」に作品を発表。民衆社を経営したりする。1936年に帰国。1938年中央公論社特派員として中国に渡り、1942年に軍部の援助の元、上海で華文女性雑誌「女声」を刊行した。1945年、上海にて脳溢血で昏倒し、死去。葬式には後子を惜しむ中国女性がたくさん参加した。自然主義の作風に近い平明な口語体で、女として芸術家として自分の力で生きていくことの困難さ、その苦しみから退廃へ傾斜していく姿を描いた。	(昭和女子大学近代文学研究室 1983: 208-221; 上田ほか 2001: 796; 吉岡 2001: 122-123; 山崎 2005: 323-331)
与謝野晶子	「婦人附録」創設の援護のために入社。 寄稿家	1895年頃から歌作の投稿をはじめ、1900年東京新詩社の創設と共に入会し、「明星」に数多くの作品を発表。1901年「みだれ髪」を刊行、同年秋与謝野寛(鉄幹)と結婚。1904年、「明星」に「君死にたまふこと勿れ」を発表。歌集、小説集、「新訳源氏物語」などを刊行。1911年「青鞥」創刊の際「女流文壇の大家」を招聘したと賛助員として紹介されていることから、そのころの知名度がうかがえる。「青鞥」に発表した作品は暗い現実生活や屈折した詩がほとんどであり、「自然主義の風潮を受け入れた晶子が、結婚後の現実生活の苦悩をありのままに告白していた」という。	社員一覽から名前が消えた翌年の1917年以降も歌集以外に、詩と評論文を交えた詩文集、随想集、小説集、古典の新訳など著書を数多く発表。1921年に文化学院の創立にかかわり、学監となり講義も担当する。1924年に婦人参政権獲得期成同盟会創立委員となる。	(村岡 2001: 188-189; 上江 1992: 289-295)
恩田和子	記者	1913年に日本女子大卒業後すぐに入社か? 婦人面担当以前は日本女子大の学歴のみしか判明せず。	1917年大阪朝日新聞社社会部記者として活躍。関西地方の女性記者の草分け的存在。1919年大阪朝日の呼びかけで西日本の婦人運動を結集した「全関西婦人連」が結成され、その中心として活躍。大正デモクラシーの高まりの中、毎年大阪で大会を開き、西日本の中産婦人諸団体、地域婦人団体を結集。1927~32年にかけて婦選請願署名運動では理事長として東京の婦選獲得同盟との連携に努め、約8万の署名を国会に提出した。1948年に朝日を退職した。	(石月 1996; 森 1990: 423; 山口ほか編 2001: 85)
下妻つま子	記者	不明	不明	
周田松枝	記者	「婦人附録」担当以前の略歴は不明。	大正・昭和期の新聞記者。長く婦人部記者を務めた後、玄文社に移り、「新家庭」を編集。1926年「都新聞」に入社し、翌年に退社。記者生活のかたわら、婦選獲得同盟で婦選運動にかかわる。	(永代 [1927] 1988: 101; 土方 1991: 342)
柳八重	記者	日本女子大学卒業後、週刊紙「家庭週報」(日本女子大学校卒業生の団体桜楓会の機関誌)、「家庭」(女子大学講義発行に伴う附録雑誌)創刊に携わる。その後、1911年に画家柳敬助と結婚し、同年婦人之友社社員になる。	明治~昭和期の編集者。読売新聞社退社後は、1920年9月に雑誌「女性日本人」、1923年に雑誌「我親」、1927年に「日本家庭大百科事典」の編集に携わる。	(柳敬助・八重夫妻展 1996: 40-46)

大月隆佐	記者、「身の 相談」	評論家、小説家。佐々木啓雪の助手をし、岩野泡鳴の弟子としても知られている。1912年、日露戦争の従軍記『兵車行-兵卒の見たる日露戦争』を刊行。評論家として『文学の調和』（1894）、「文学の審美」（1903）を発表。1925年には創作『嗜欲の一皿』を刊行した。	1921年に『二六新聞』に入社。雑誌『表現』の編集にたずさわる。その他、哲学書、宗教書を著す。『孔子鑑賞』（1929）、「哲学概論」（1930）、「親鸞聖人-関東聖蹟巡拝記」（1934）、「天皇信仰と大國隆生』などがある（1937）。	（新聞及新聞記者社：26【1922】1988；伴1977：267；国立国会所蔵書データベース）
前田晃	初代婦人部長	1898年、電信技師として上京。そのち早稲田大学に入学。1904年に隆文館に入り、「活動の日本」、「新声」を編集。1906年に博文館に入り、田山花袋主催の『文章世界』の編集に従い、田山のよき腹心として活躍する。『文章世界』は自然主義の一拠点であり、前田も小説、翻訳、評論を発表し、自然主義文学運動を推進した。翻訳は『キエホフ集』（1912）、「キイランド集」（1913）など。短編や評論も『早稲田文学』や『文章世界』にいくつか発表しており、いずれも自然主義文学の立場にたってなされた業績である。	小説家、翻訳家、評論家と多岐にわたって活動したが世界的には翻訳家として有名で、良心的な訳文には定評があった。1924年より金星堂の『世界文学』を主宰した。1943年より電通出版部顧問に。長く雑誌記者として過ごしたため、文壇人とのお交りも多く、明治40年前後の自然主義文学運動の裏面の消息に詳しい「明治大正の文学人」を発表。ほかにはゴンゲール「ジェルミニイ・ラセルトゥ」（1948）の翻訳などがある。	（佐々木 1977：216；柳田 1957：114）
水野仙子	記者、「身の 相談」	1903年から『少女界』に、1905年から『女子文壇』などに投稿し、入選する。1909年発表の『徒勞』で田山花袋に認められ、同年上京して田山家に起居する。翌年『お波』『娘』を発表して文壇で認められる。1911年、与謝野品子夫妻の紹介により、『箒の香』の編集に従事する。同年、花袋門下の川浪道三と結婚。また『青鞥』同人となる。入社時には既に自然主義系女流作家として知られていた。『青鞥』にも小説を発表。自然主義からの脱皮時代で作家としては低迷期だった。	療養中も作品を発表し続けており、1917年には「一樹の陰」、「道」などを、翌年には『時事新報』に「初めて試みる創作評」を連載し、『中外新論』に「お三輪」、「沈みゆく日」を発表。1919年には『女学世界』に「響」、「文章世界」に「酔いたる商人」を発表するが、病状が悪化して30歳で死去。	（武田 1995；安 語 2001：158-159）
生田(西崎)花世	記者	小説家、詩人。小学校教師の傍ら、『女子文壇』に長曾我部菊子の名で寄稿。1910年に上京し、教師、訪問記者を経て、1913年『青鞥』社員となる。翌年『青鞥』に書いた「恋愛及生活離れに対して」を読んで感化した生田春月と、出会って2週間で共同生活をはじめ。『反響』に載せた「食べることと貞操と」が貞操論争の発端となる。	1916年、『ピエトリス』を創刊、発起人となる。1928年長谷川時雨の『女人芸術』創刊に協力する。その後『她地』等女性文学雑誌へ詩・小説を発表。春月死後は『詩と人生』を主宰。1954年『源氏物語』の講義を始め、生田源氏の会と称せられた。小説集に『燃ゆる頭』（1929）、詩集『春の土』（1933）などがある。	（戸田 1986：61-62；和 田 1971）1995；米 田 2001：36-37）
野坂貞子	記者	不明	不明	
保高德蔵	記者	中学卒業後、1906年に石炭輸入商の父を手伝うために朝鮮に渡る。1910年に徴兵のため帰国するが不合格。翌年上京し早稲田に入学する。1915年に早大卒業間近に読売新聞社に入社。	読売新聞社退社後、博文館に移り『女学世界』の編集にあたる。1921年に『棄てられたお豊』を『早稲田文学』に発表。1928年『泥濘』が第1回改造社懸賞小説に入選した。1932年『文学クオタイリ』を、翌年『文芸首都』を創刊して主宰し、『文芸首都』は晩年の1970年まで続き、多くの新人作家を育てた。著書に『孤独結婚』（1936）、「勝者敗者」（1938）、「道」（1958、未完）や『作家と文壇』（1962）、「人間野季吉」（1961）などがある。	（粟 坪 1972：351-359、1977：389-390）
窪田空穂	記者、「身の 相談」	1896年東京専門学校（現早稲田大学）を約1年で中退し、大阪の米穀仲買い商に勤務したが、1897年母危篤のため生家に戻り、1899年小学校の代用教員となる。1900年、『日本』（新聞）、「文庫」、「明星」に短歌を投稿し、与謝野鉄幹に認められ新詩社社友となる。同年東京専門学校に復学し、文学活動を本格的に始める。1903年『電報新聞』と歌壇選者となり、翌年東京専門学校卒業と同時に社会部記者となる。この年植村正久の柳松教会に通い、受洗し、她地詩歌集『まひる野』を刊行。1906年電報新聞社退社後は田山花袋と交わり自然主義的小説を書いた。新進作家として知られる。1911年短編集『短辺』を刊行。同年女子美術学校講師に就任。1914年に文芸雑誌『国民文学』を創刊。1915年歌集『濁れる河』を刊行。同年女子英学辞典し、翌年『読売』に入社。	1920年早大文学部講師、1926年教授となり、1948年の定年退職まで務めた。早稲田在任中、また退職後も歌集、歌論、評論、古典の現代語訳、国文学の研究書など多数の著書を発表する。歌風は人生味に透徹した、写実的な身辺歌に独自の架構を指したとされる。代表的な著書に『土を眺めて』（1918）、「鏡象』（1926）、「冬日ざし』（1941）、「冬木原』（1951）、「老樹の下』（1960）などの歌集、「歌詠と随筆』（1933）、「明日の短歌』（1948）などの歌論、『新古今和歌集評釈』（上・下、1932-1933）、「万葉集評釈』（全12巻、1943-1952）などの評釈、『古典文学論』（1952）などの国文学の研究、『窪田空穂全集』（全28巻・別1巻、1965-1968）及び、『窪田空穂全集』（1935非凡閣、1952中央公論社、1981短歌新聞社）がある。	（武 川 1968：347-414；窪 田 1962；上 田 ほか 2001：452-453；広 田 2001：376-377）
佛子須磨子	記者	京町堀の願宗寺（真宗西本願寺派）に生まれ育つ。直木が早稲田大学在学中に同校をはじめていた。直木の早稲田時代の友人が婦人部記者である保高德蔵であった。最初、保高から直木に声がかかった婦人部記者の話を、本人の不首尾から不採用になった。それでも第一子が生まれて、生活が困窮していたため、代わりに須磨子が婦人記者として就職することになった。	関東大震災後家族で大阪に住む。記者、文筆家としての活動などは特になかったようだ。1919年に直木と正式に入籍するものの、直木が急逝する前年の1933年に離婚。	（植 村 2005）
松村英一	記者	高等小学校退学後、叔父の経営する錦線商で小僧奉公する。1905年、『電報新聞』の窪田空穂選歌欄に投稿し、15歳で窪田に師事。10月窪田を中心に一〇月会を結成した。1913年の『春かへる日に』は、長女をなくした鬱然たる内心を吐出したもので、自然主義思潮によって読み進められた作品である。1914年窪田主宰のもと『国民文学』を創刊。その後、発行、編集を窪田に委任される。	1917年歌壇総合誌『短歌雑誌』などの編集も手がける。1919年に『現代短歌用語辞典』を編集して、以降多数の入門書を編述する。大日本歌人協会等の運営に携わり、宮中歌会始選者を務めた。歌集に『春かへる日に』（1913）、「露原』（1947）、「山の井』（1950）、「松村英一全集」（上、下、1958）、評論に『現代短歌の志向』（1943）、「現代短歌の話』（1951）など。	（山 本 1977：250-251）
百瀬しづ子	記者	1909年に法學士五明正と結婚し、一児を産む。1915（大4）年『青鞥』に『沈丁花』、「昔昔」、「最初の家」を発表し作家となる。3作品とも伝統的色彩の濃い作品である。1916年に経済的自立を求め『東京日日新聞』社会部記者となりの離婚。子どもと別れ、苦しみ続けた。同年『ピエトリス』の同人で創刊に参加し、小説なども書く。筆名は五明俊文子。翌年に読売新聞社に入社。	1919年には『三角の眼』を発表する。1920年に新婦人協会発会式に出席するが、活躍の様子はうかがえない。1921年に日本人男性と朝鮮人女性の恋愛を描いた小説『地に逆く者』を発表。大正末期以降の消息は不明。	（江 刺 1997：307；安 語 2001：94；『読 売』2009.4.30朝刊15面）

石島菊枝	記者、「有名婦人訪問」	小説家志望で「少女之友」に寄稿。同僚の石島佛次郎と結婚して退職。	劇作家。婦人参政権獲得運動にて活躍。その後、創立まもないNHKに専属ライターを長くつとめた。	(「読光新聞」1975. 6. 23 夕刊9面；江刺1997: 307)
安成二郎	婦人部長	中学退学後に上京し、小史として製錬所で働く。1914年に内田魯庵の世話で金尾文淵堂に入り文学雑誌の編集にかかわる。同社倒産後、「サンデイ」で記者、「楽天パック」、「家庭パック」で編集「実業之友世界」で記者となり、その後編集長となる。「女の世界」の編集に携わる。同時に短歌を発表し、1916年に歌集「貧乏と恋」を発表。	関東大震災後、大阪毎日新聞芸部嘱託東京在勤となる。戦後平凡社に入り、「世界大百科事典」の監修に当たる。歌集「夜知麻多」(1938)、「俳句入門」(1942)、「短歌入門」(1943)、随筆集「白雲の宿」(1943)、文壇交遊録をまとめた「花万葉」(1972)、親友大杉栄について書いたエッセイや小説からなる「無政府地獄」(1973)を発表。	(紅野1977: 392；安成1972: 257-260；近代日本社会運動史人物大辞典編集委員会1997: 645-646)
三大寺本紹	1919年頃 社会部から婦人部へ、「身の上相談」	中学時代より評論を好み、1899年に大阪にて同志と共に「週刊新聞」を発刊し、1902年「京都新聞」の記者になる。間もなく上京して「萬朝報」に入り、在社7年。その間大阪支局長を務めたが辞して、1914年に読光新聞記者となり、社会部編集より、婦人欄編集、身の上相談係り。	身の上相談担当後は、宗教記者を経て1924年地方編集に転じ、翌年同主任となる。次で通信部主任に昇進し、1928年地方部主任に転じ、1930年に退社。その2年後に腎臓病で他界。死後の1934年に「吞龍聖人伝」が大光院より発行されている。	(永代[1930]1988: 415；「讀實」1932. 2. 25 朝刊7面；水代[1927]1988: 126)
望月百合子	記者	成女女学校卒業後、一度甲府の実家に帰ったものの、用意されていた縁談を拒否して再び上京した。成女の校長の宮田修が松本雲舟に望月を紹介して、読光新聞社に入社した。	女性解放運動家、文芸評論家、翻訳家、歌人。1920年父と渡仏。ソルボンヌ大学で西洋哲学を専攻。帰国後、無政府主義者の論客として女性解放を訴え、講演・翻訳等でも活動した。小説家の長谷川時雨を中心とする「女人芸術」の創刊に参加。のち高群逸枝、平塚らいてうらとともに「婦人義塾」を創刊した。1930年アナキスト古川時雄と結婚。1937年旧満州に渡り、「満州新聞」の婦人部長となる。1948年帰国。戦後も、翻訳や評論活動を続け活躍し、「自由で平等な社会」を説く。著書に「大陸を生きる」(1941)などがある。	(江刺1997: 262-268；坂本1990: 1617；山口ほか編2001: 347)
山口たかこ	記者	不明	不明	

ている。そこで小橋は「身の上相談から見た社会」で「未だ嘗て見たことのない程、人間を露骨に見せられ」たと、「聖ペテロ」⁽²⁷⁾のように「病を親切に看護すること、世の指導者の務べき処」だとし、投稿者に答える際は「成るべく人々の現在と将来とを見て、最もよき処置、最もよき道を選ぼうようにしたい、そうする事が人を新しい生涯に導き、希望を与えるには非常に必要な事と思つて」いたと語る(小橋1914前掲: 31)。

第三の特徴は自然主義である。表3を見ると、「身の上相談」を担当していた水野、窪田、大月、婦人部長の前田、「婦人附録」のために入社した与謝野、田村、記者の保高、松村は自然主義に傾倒した文学作品を残しており、彼らのなかには自然主義作家の田山花袋とつながりが深い者もいる。大月は自然主義作家の岩野泡鳴の弟子である。保高が退社後に書いた処女作「捨てられたお豊」は自然主義作家の正宗白鳥から賞賛を受けている(栗坪1972: 354)。自然主義文学は社会批判的性格と告白文学的性格に分けられ、中年作家と女弟子の関係を告白した田山の『蒲団』(1907)の成功から次第に後者の傾向が優勢になっていった(日地谷=キルシュネライト1996: 110)。そもそも『讀實』は自然主義文学との関連が深い新聞であった。「日曜附録」を編集していた正宗が島村抱月の弟子であった関係から、1907(明治40)年前後に境に『讀實』では早稻田系の自然主義論や自然主義派の連載小説が主流となった(読光新聞社社史編集室1987: 254)。

自然主義に傾倒していた関係者たちは、現実を直視してその体験を客観的に描写しながら身辺の状況を写實的に描き出し、主体的に語る作品を残している。たとえば、窪田は写實的な身辺歌に独自の歌境を開拓した(村崎1954)。尾形によると、水野は1909(明治42)年、『文章世界』に書いた「徒勞」において死産に終わった姉の出産を描き、特異な題材と光景を緊密な文体で、リアリティを持って描いたことが田山から評価されている。尾形は「身の上相談」を担当する頃の水野の作品について、自分の置かれた状況とその心情の告白によって、夫とのズレを埋める方法、あるいは女だけが持つ息苦しい宿命から脱出する方法を

導き出そうとしていると評している（尾形 1986：8-12）。

第四の特徴は女性解放思想である。表3をみると、生田、田村、水野、百瀬のように、婦人部記者になる時にはすでに婦人の置かれた状況や、生き難さを著して『青鞥』や『女子文壇』などの雑誌に発表していた。1914（大正3）年、生田が『反響』に発表した記事がもとで「貞操論争」がおこり、女性の処女性や売春に関する議論が発展していくこととなった。「婦人附録」でも生田の入社した頃の1915（大正4）年9月17日～30日まで、記事「生命か貞操か」が14回にわたって連載された。周田は婦人部記者時代に、小橋、生田、石島、恩田、百瀬などは讀賣新聞社退社後に婦人参政権獲得運動に参加し、「新婦人協会」で活躍している（折井・女性の歴史研究会編 2006：201-270）。

「婦人附録」では1919（大正8）年6月には「働く女」という記事が32回にわたって連載されており、逋信省預金局（交通・逋信行政の中央官庁）の取材では、男子に比べ女子は昇進の機会や賃金が少なく、いつまでたっても高等官の下止まりだという問題が論じられている（『讀賣』1919. 6. 26, 4面；2009. 4. 11朝刊16面）。さらに、諸外国の者も含め「婦人参政権」に関する記事、日本初の市民的女性団体と称されて女性の選挙権を求める活動を進めた「新婦人協会」、婦人参政権運動の中心的団体である「普選獲得同盟」についての記事が掲載されていた⁽²⁸⁾。

4. 結論——「婦人附録」関係者の特徴から考察する相談欄の成立過程

以上のような「婦人附録」関係者の特徴は「身の上相談」の開設、発展になんらかの影響を与えているだろう。ここでは、本稿で明らかになった関係者の特徴から「身の上相談」の成立過程について考察していく。

第一の大正期から昭和戦前期にかけて活字ジャーナリズムの編集にかかわっていた人びとが多いという特徴から、「婦人附録」の開設当初、編集陣容を強化するために、また紙面を継続させるために新聞、雑誌の発刊、編集の経験があり、その

ノウハウを知り、独自に発刊する力を有しているものが必要だったことがうかがえる。特に「身の上相談」は投稿された手紙、口語の面談から相談の論旨を汲み取り、編集し、相談だけでなく回答を、誰にでも伝わりやすい文章にしなければならない。このような当時としては非常に高いリテラシーと編集能力が求められるその作業を可能にしたのは、関係者たちの豊富な活字メディアの編集経験だったのだろう。また「身の上相談」をほぼ毎日のように掲載し、長期にわたって連載して定着することができたのも、この経験によるところが大きいだらう。

さらに、このような「婦人附録」の関係者たちが多方面の雑誌、新聞へと移っていたことから、彼らは大正、昭和初期の活字ジャーナリズムの発展に寄与していたともいえる。また、『朝日新聞』、『婦人週報』などにも「身の上相談」が開設されたことから、「婦人附録」関係者たちから「身の上相談」に関するノウハウが他の新聞、雑誌にも伝達され、その開設にも寄与した可能性が高い。

第二に、キリスト教の影響という関係者からの特徴から、さまざまな問題を抱えて苦しむ人びと、つまり社会的に「病む人びと」を多く救おうとする使命感から、「身の上相談」は発展していったといえる。小橋が「身の上相談」の体験を語った立場は、「婦人附録」開設時の一節、「幾多の問題に対する真実で間違いのない解決の好適例を示したい」という記述と共通している。どちらの記述にも投稿者たちの独白をできるだけ多く掬い取り、そこで彼らに最もよい道を指し示そうとする意志がみえる。

回答の文面にも教会の牧師のような姿勢がみえる。たとえば、小橋と松本の担当時期に掲載された、離縁された夫との復縁を願う女性からの相談である。この相談に対して、「求めよ、さらば与えられんですからどうしても復縁する決心で夫に御文通なさい」（1914. 5. 26）と回答されている。白井によると、窪田の回答にもキリスト教信仰の影響が見受けられるものがある。たとえば、継子とうまくいかない継母の悩みに対し、「足蹴にされても辛抱する程の愛を貴方は持つ事が出来ない

でしょうか……進んで此方から与えて行こうとする事が、何よりもお考えになるべき事です」(1916. 11. 2)と回答し、母親の迷信に悩む青年には「注意すべき母上の心はあわれむべきもので憎むべきではないという事です」(1916. 12. 18)と回答している(臼井 2006: 42-59)。教会での説教を聞き慣れていた彼らは、救いを求める人びとへの説諭やアドバイスのヒントを常に得ることができたのではないだろうか。そのため、「身の上相談」は好評を得ながら継続することができたのだろう。

第三に、自然主義の影響という特徴について考察する。和田謹吾によると、『蒲団』のような自然主義作家が意図した客観描写と内面描写の達成時期は大正期だったという(和田 [1966] 1983: 375)。このありのままの人生を事実忠実に描写する作品群が「私小説」と呼ばれる前に、「身の上話」「身辺雑記小説」などと呼ばれていた(日地谷=キルシュネライト 1996: 110)点は注目値する。自然主義的描写方法が可能にした私小説の様式の構造は主人公、語り手、作者の視点が一致していることである。つまり、日地谷によるとこの文体は「読者の、主人公への完璧な同一化において成立する。読者はまさに、主人公のなかへ入り込んで行くのである。さらに読者は、主人公の眼を通して世界を把握し、それは、合理的要素のほとんどを排除して情緒的に行われる。その結果は、知的なプロセスをはじめから除外した、感情の一致である」(日地谷=キルシュネライト 1996: 115)。

「身の上相談」には投稿者の悩みに共感し、問題を共有しようとする回答者の姿勢も見受けられた。臼井は、窪田が回答で頻用する「御察し申す」という言葉を、窪田の「相談者への共感の深さ」のあらわれだとみなす。そして、「自然主義文学の波を潜った」窪田にとっては老若男女を問わずその境遇に自らを置いてみることは可能だったと考察する(臼井 2006: 355)。「身の上相談」が発展していったのは、このような自然主義という背景があったと考えられる。自然主義に傾倒した関係者たちが執筆する「身の上相談」の文体によって、投稿者のありのままの人生が忠実に描写

され、読者はそこに表出している投稿者の私的経験に感情移入することができたのではないだろうか。また、結婚、家族の悩みを主に掲載できたのも、読者が投稿者の私的経験を共有することに成功する文体を用いていたからではなだろうか。

第四の婦人解放思想という特徴から、「婦人附録」関係者の間には、女性の置かれた現状を吟味し、改善しようとする機運が高まっていたことが予想される。「身の上相談」はこのような気運のなか、女性の置かれた立場を把握して、そこにある問題を相談という形で提示し、回答記事によって、投稿する、あるいは来社する女性たちを、さらに同じ問題で悩む女性たちを援助したいという意志によって発展していったのではないだろうか。

このような「婦人附録」関係者の特徴は、「身の上相談」が恋愛、結婚、夫婦、家族の問題を描写し、問題への示唆的な回答を提示する言説空間として確立したこと、読者の継続した反応を得ることに成功しながら定着、発展したことに影響を与えているといえる。

今後は、実際に「身の上相談」の内容と文体を分析しながら、今回得た知見を検証することを課題としたい。

付記

本稿は、桑原桃音、2013「大正期における配偶者選択に関する歴史社会学的研究——『讀賣新聞』「身の上相談」欄にみる葛藤の分析」(龍谷大学大学院社会学研究科に提出した2013年度博士論文)の第2章第4節の一部を加筆・修正したものである。

注

- (1) これまでの研究でも、身の上相談は投稿と回答のやり取りのなかで、理念や規範が構築される言説空間とみなされてきた。たとえば、1930年代の『朝日新聞』「女性相談」欄を分析した今井小の実は、身に降りかかる悩みが文字化されて「新聞紙上に公開されることによって一般女性たちの間で投稿者の問題を自らの問題として共有することができた」媒体だとみなし、投稿・回答記事を一括りの「語り(narrative)」言説とみなしている(今井 2000: 52-54, 2005)。

- (2) 1923（大正12）年9月1日の関東大震災により讀賣新聞社屋は炎上、新聞発行が不能となった（読売新聞社史100年編集委員会1976：249）。同月12日に4ページで『讀賣』は発行され、21日には「よみうり婦人欄」が再開した。震災以降、「身の上相談」への投稿募集が何度か掲載され、4月に5件相談が掲載された。しかし、その後「身の上相談」は再び開設されず、1931（昭和6）年7月14日に相談欄「悩める女性へ」が新設された。鶴見によれば、太平洋戦争末期、各雑誌、新聞の身の上相談はまったく姿を消す。戦前最後の『讀賣』の相談欄は1937（昭和12）年6月であった。日本国家は公のコミュニケーションの場面から個人的生活の問題の発表を中止した（鶴見1956：29）。
- (3) 池内が調査した結果、相談欄が確認できた雑誌は、『明治協会雑誌』（相談欄連載時期：1883）、『女学新誌』（1884-1885）、『女学雑誌』（1885-1889）、『以良都女』（1888-1890）、『婦女雑誌』（1891-1892）、『都新聞』（1906-1917）、『東京日日新聞』（1915）である（池内1953：9）。
- (4) 池内によると、『女学雑誌』『いへのとも』、『都新聞』『相談の相談』も恋愛、結婚、夫婦関係に関する相談をとりあげていたものの、職業の仲介斡旋、家事に関する知識の問答が主流であった（池内1953）。
- (5) 「吾国今の風とて女には心よりの友人あるなく、たとえありとも近きには反って語り難き由も多きことなり。故に本号を初として家の友といえるを設け、欺る人々の問を受けて吾人の思うよしを答うるの便といたす」（『女学雑誌』35：1886.9.15）とある。
- (6) 『新聞販売百年史』（1969）によると、日清戦争（1894-1895）の期間、読者の側が戦地出征した親族の安否確認のために新聞の戦況報道に集中し、新聞社側がそれに呼応して戦況速報、号外競争をしていた。その結果、新聞の購読者は著しく増加した。日露戦争後についてみると『大阪朝日新聞』では、一日の発行部数は「1910（明治43）年に16万部だったものが、1914（大正3）年には24万部になり、第一次大戦中の1917（大正6）年には31万部、戦後の1921（大正10）年には44万部、翌年には56万部」と急伸していた（山本1987：63）。
- (7) また、有山（1995）によれば、日清戦争の頃、新聞は量的拡大と「民衆の傾向」となるなかで

- 「営業的」な側面を強め、そのジャーナリズム活動を変質させていった。たとえば、1870（明治20）年頃から日清戦争までの新聞は、『日本』や『国民新聞』などのような「政治的言論によって政治状況に働きかけ」る「独立新聞」が新聞界全体を主導していた。この新聞の読者は財産と教養を持つ選挙権保有者である「有識階級」とその予備軍、あるいはその周辺であった。ところが、『万朝報』や『二六新報』は低価格の購読料、読み書き能力の低い読者を吸引するために文章の平易化、連載小説などの娯楽を提供していた。さらに、社会報道で犯罪や事件をセンセーショナルに報道しながら、不平、憤懣を抱える都市の中下層に向けて成功者達の腐敗墮落を「告発指弾」するなどしていた。そうすることで、読者に強い刺激を与え、殊に都市中下流層を中心とする「特定の社会群における一般感覚の興奮」を作ることによって新しい読者を獲得しようとしたのである（有山1995：24-36）。そのほかには、資本主義の発展によって盛んになった企業熱を反映した経済記事、紙面の一部を飾る景品の要素の強い「附録」などが掲載された。やがて新聞販売の競争によって、いたるところで「附録」合戦が展開されていた（山本1948：174-178、[1970]1992：72-74；新聞販売百年史刊行委員会編1969：301；羽島1997：114）。
- (8) 「附録」とは、新聞紙面の一面を用いて銅版や石版刷りの肖像画、有名画家の彩色美人画、小冊子や暦を盛り込んだ便利帳、双六など景品の要素の強い紙面のことを指す。附録の流行は全国の地方新聞まで広がり、新聞販売に大きな役割を果たした（羽島1997：114）。
- (9) 『讀賣』は、1874（明治7）年の創刊から2年目には関東近県だけでなく、大阪、神戸、京都にも売りさばき所を開設し、3年目には1日の発行部数を2万5千部に伸ばし全国一の新聞となった（読売新聞社史編集室1987：217,224；読売新聞社1994：665）。全国一位といえども、この発行部数から、創刊当初は全人口（当時3,600万人）の少なくとも約0.07%にあたる人々が『讀賣』を手にしてたと推察される（人口については日本統計協会編『日本長期統計総覧 第1巻』[2006]を参照）。明治20年代末から明治30年代初期頃の『讀賣』は、日清戦争後から「金色夜叉」などの家庭小説などで人気を博し、島村抱月、徳田秋声や鏗木清方など著名な作家、画家が在社し、文学新聞としての価値を高めていた。しかし、日清・日

露戦争の販売競争激化のなか部数は伸び悩んだ。その理由は、日露戦争から戦後にかけて、『讀賣』が、①財政的な理由で戦地特派員を一人しかおけなかったため戦争の報道競争をする力に欠けていたこと、②新聞経営経験のない高柳豊三郎による、報道に徹しきれない運営方針や編集方針が不統一に陥っていたこと、③従来の特徴だった文学記事は、『朝日』に夏目漱石が入って以来光彩を奪われ、④何等の新趣向も加えずに紙面は全く特色を失ったことがあげられる。さらに、大正期には紙面内容は婦人向きの新聞で、新聞界に於いても殆ど問題にならなかったため部数は増えなかったようだ（日本新聞百年史刊行委員会 1969：329-330, 504；山本 [1970] 1992：93；読売新聞社社史編集室 1987：250-259）。大正期前後の一日の発行部数を見ると 1911（明治 44）年が 2~3 万部、1927（昭和 2）年が 10 万部である。身上相談欄を持っていたその他の『都新聞』（1911 年は 5~7 万部、1927 年は 12 万部）や『東京日日新聞』（1911 年は 7 万部、1927 年は 45 万部）と比べると少ない（山本 1981：407-412）。

- (10) 1913（大正 2）年 2 月 10 日、シーメンス事件に激化した人々は、政府よりの記事を掲載していた讀賣新聞社を襲撃した。政治色を打ち出して襲撃されることをおそれた『讀賣』は「政治」から距離をとろうとしていたのである。
- (11) 当初の「婦人附録」紙面をみると、家庭記事、婦人問題の時評、各界で活躍する女性の紹介、流行や物価に関する話題、生活情報、催しの案内、世界の童話などが掲載されている。この記事内容から、当時、どのような情報が女性向けとみなされていたのかがわかる。
- (12) 「身の上相談」以外にも「婦人附録」では、創設第一日目から「婦人の声」という投書欄が開設されている。
- (13) 1915（大正 4）年 1 月 1 日には「身の上相談」の連載を振り返った記事が「婦人附録」に掲載される。その記事には掲載開始から 1915（大正 4）年の 1 月頃まで、手紙による投稿が 1 万 3,794 人、直接の担当記者を訪れた者 725 人であったことが記されている（『讀賣』1915. 1. 1）。その状況に対して担当記者は、「身の上相談」が「社会の要求に適していたもの」と解釈している。
- (14) 1916（大正 5）年に 200 件近く掲載件数が減少しているのは、限られた紙面で相談と回答をより詳しく記すために相談の掲載数が 1 日複数から 1

件になったからである。1922（大正 10）年から投稿掲載件数が減少したのは、1919（大正 8）年 10 月から「婦人欄」に設けられた「紙上衛生顧問」や「紙上法律相談顧問」など別の相談欄が定着したこと、1921（大正 10）年 8 月 29 日に警視庁直轄の「身の上相談所」の紹介記事が掲載されたことなどが要因だと思われる。減少の原因は他にも考えられるが、今後の課題としたい。

- (15) 斎藤（1996）が分析した婦人雑誌に掲載された相談欄は、この他にも『婦人世界』の身の上相談が 8 年で 144 件、『婦人界』はわずか 8 回で終了、『反響』は 4 ヶ月間の連載であった。新聞よりも内容が詳細に書かれ、かなりの頁にわたって掲載されているのだが、件数が少ない、あるいは掲載期間が短い（斎藤 1996）。『都新聞』「読者と記者」、「相談の相談」は、投稿件数が月平均 1,219 件、1 日平均 40.9 件であったが、1. で述べたように恋愛、結婚、夫婦関係の相談が中心ではない（山本 1981：249）。
- (16) 1890（明治 23）年に公布された小学校令により、小学校は国民形成や生活への基礎的準備をおこなう「民衆教育」の学校として性格づけられるようになった（山内太郎編 1972：153）。1900（明治 33）年に改正公布された小学校令は尋常小学校 4 年の就学義務を確定した。1885（明治 18）年に男女あわせて 49.62% であった就学率は、1905（明治 38）年には 95% を超え、1920（大正 9）年には 99% 以上を超え、男女の差もなくなり、学齢児童のほぼ全員が義務教育を受けていた（森 1984：62-66；桑原 b 86）。
- (17) 永嶺によると、明治 30 年代以降に誰もが読書できる環境の整備が次のようになされた。①大多数を占める小学校卒業者の読み書き能力の低下防止への有効な対策として、内務省が全国の公共図書館を充実させた。②大量輸送手段である鉄道の幹線網が全国拡大したことにより、全国流通網が整備された。③都市部の新聞社・出版社は同業社との激しい競争のなかで、新聞販売業者や書籍雑誌取次業者といった新聞・出版の流通にかかわる企業家を利用しながら地方の読者の開拓を進めた（永嶺 1997：19-20；2004：iii-v, 3-46）。婦人雑誌読者も「都市のサラリーマン家庭の主婦」だけでなく、農家・商家の主婦、「職業婦人」「女工」「女中」などへ、また中等教育を受けた女性だけでなく小学校や高等小学校しか出ていない女性たちも含まれていた（木村 2010；永嶺 1997）。

- (18) 『讀賣』は1874(明治7)年11月に、本格的な大衆新聞をめざすため、新聞で初めてすべての漢字にフリガナをつけて創刊された。創刊時の社告には「此の新ぶん紙は女めいご童のおしえにとて為になる事柄を誰にでも分かるように書いて出す旨趣でございますから」(『讀賣』1847. 11. 2)と広い層に向けて編集していたことがわかる。
- (19) カテゴリについても拙著を参照のこと(桑原2013a: 77)。
- (20) また、高梨(田中)孝子は婦人部記者ではなく特別寄稿家であるため、入社して編集に携わっておらず、「身の上相談」を定着させる社会空間に恒常的に関わった関係者とみなせないため除外した。1919(大正8)年に「婦人附録」充実のために委嘱を受けた山川菊栄、山田わか、平塚明子(読売新聞100年史編集委員会1976: 241)も同じ理由で除外した。
- (21) 望月の回想では「身の上相談専任の三大寺という年配の男」とある(江刺1997: 262)。「ヨミダス歴史館」からフルネームと入社時期が判明し(『讀賣』1932. 2. 25, 7面)、『新聞人名辞典』(永代[1930]1988)には婦人欄の身の上相談係りの経歴が記されていた。
- (22) 表2作成にあたっての情報出典は次の通りである(関係者(書誌情報))。五來、前田(読売新聞100年史編集委員会1976)、小橋(中村1989)、松本(佐々木1991; 中村1989)、羽仁(自由学人羽仁吉一編集委員会2006)、与謝野、田村、百瀬、望月、山口、石島(江刺1997)、与謝野(村岡2001; 『読売』2009. 4. 7朝刊25面)、周田(永代[1927]1988)、柳(柳敬助・八重夫妻展1996)、前田(佐々木1977)、大月(青野1959)、水野(武田1995)、生田、石島(『読売』1961. 10. 4朝刊9面)、恩田、下妻、野坂、保高(『讀賣』1932. 10. 22, 9面)、窪田(白井2006)、佛子(植村2005)、松村(山本1977)、石島(『読売』1975. 6. 23夕刊9面)、安成(紅野1977; 安成1972)、三大寺(永代[1930]1988; 『讀賣』1932. 2. 25, 7面)。
- (23) 採用試験に受かりやすい大学や学閥があるというよりも、新聞記者の縁故採用が多かったため出身大学が偏っていると推測される。筆者が調べた資料をみると、公募による採用だと判明しているのは保高と野坂だけで、他の記者たちは推薦、勧誘という縁故採用である。たとえば、柳は羽仁の勧めで(江刺1997: 251-252)、窪田は同じ早稲田の前田に誘われ(白井2006)、保高が同じ早稲田の直木三十五を誘った縁で妻の佛子が記者となった(植村2005: 38-40)。
- (24) 下妻は前田が就任した1914(大正3)年にはすでに在社していた(『讀賣』1932. 10. 22, 9面)。しかし、小橋による開設時の回想には名前が挙がっていない(江刺1997: 251)。1917(大正6)年2月17日の窪田の日記に婦人部メンバーとして名前が挙がっているため、この時点までの在社は確認できている(白井2006: 400)。
- (25) 実際に、「婦人附録」には矯風会の会合の告知(「婦人の会」1914. 4. 3, 9面)、矯風会が出した「芸妓團芸を禁ずる請願」(1914. 4. 4, 5面)、「矯風会事務所成る」(1914. 4. 10, 5面)、「戦場へ贈物 矢島楯子」(1914. 8. 30, 5面、矢島は矯風会会長)、「酒保を禁ぜよ 矯風会からの建議」(1914. 12. 16, 5面)など矯風会の動向がとりあげられている。1914/4/3~1915/4/3まで1年間に限って「ヨミダス歴史館」において「矯風会」で検索すると16件の記事が抽出された。「会報じみている」いうほどの量ではない。婦人矯風会は明治期から活動する、平和、純潔、排酒を三大目標とするキリスト教徒の女性団体であり、禁酒運動や、公娼制度の廃止、一夫一婦の建白書を帝国議会上に提出するなどしている。
- (26) 松本が1902(明治35)年に記した雑誌『羊門』の発刊の辞は、キリストの教えに基づいており(表3参照)、また、『羊門』で発表した「我が希望」(1902年6月号)という詩にはキリスト教徒として生き、国民を教育したいという希望が表明されている(佐々木1991: 121-122)。一方、窪田の伝記には、植村の説教は「信者の各自が自分のことを言われているように胸に響いたという」とあり、窪田は植村によって「人生の解明に強い力を与えられるとともに、文学に対しての基準を確認することができたのである」と述べる(窪田1962: 46-47)。
- (27) ベテロとは「貧しい者、病める者、苦しむ者たち」に生活の糧を与えるためにキリスト教団を組織したことで「大衆の信望」を集め、信仰心を固めた人物である(中山2008: 342)。
- (28) 「婦人附録」開設の1914(大正3)年4月3日から1926(昭和元年)年12月25日までを検索したところ、「婦人参政権」は380件、「新婦人協会」は113件、「普選獲得同盟」78件確認できた。

引用文献

- 青野季吉, 1959, 「解説——感想をもってこれに代える」窪田空穂『わが文学生活』春秋社, 222-226.
- 有山輝夫, 1995, 『近代日本ジャーナリズムの構造——大阪朝日新聞白虹事件前後』東京出版.
- 池内一, 1953, 「身の上相談のジャンル」『思想の科学・芽』31: 8-13.
- 石月静枝, 1996, 『戦間期の女性運動』東方出版.
- 今井小の実, 2000, 「身の上相談」と母性保護運動——当事者の“語り”に光をあてて』『社会事業史研究』28: 45-63.
- 今井小の実, 2005, 「『身の上相談』の分析, その方法と結果——『女性相談』に浮かびあがる昭和初期の母子問題」『社会福祉思想としての母性保護論争——“差異”をめぐる運動史』ドメス出版: 238-256.
- 入江晴行, 1992, 「与謝野晶子年譜」木挽社編『群像 日本の作家 6 与謝野晶子』小学館, 289-295.
- 上田正昭ほか, 2001, 「田村俊子」「窪田空穂」『コンサイス日本人名事典』三省堂, 452-453, 796.
- 植村頼音, 2005, 『直木三十五伝』文芸春秋.
- 白井和恵, 2006, 『窪田空穂の身の上相談』角川書店.
- 江刺昭子, 1997, 『女のくせに——草分けの女性新聞記者たち』インパクト出版社.
- 太田孝子, 1979, 「羽仁吉一」下中邦彦編『日本人名大事典』平凡社, 626.
- 尾形明子, 1986, 「水野仙子著『水野仙子集』解説——その生と文学」『水野仙子集(復刻版)』不二出版, 1-17.
- 折井美耶子・女性の歴史研究会編著, 2006, 『新婦人協会の研究』ドメス出版.
- 河崎吉紀, 2002, 「一九二〇年代における新聞記者の学歴——日本新聞年鑑所収「名鑑」の分析を通して」『マス・コミュニケーション研究』61: 121-133.
- 木村涼子, 2010, 『「主婦」の誕生——婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.
- 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会, 1997, 『近代日本社会運動史人物事典 4』日外アソシエーツ, 645-646.
- 窪田章一郎, 1962, 『窪田空穂』桜楓社.
- 粟坪良樹, 1972, 「保高德蔵年表」保高德蔵『保高德蔵選集 全一卷』新潮社, 351-359.
- 粟坪良樹, 1977, 「保高德蔵」日本近代文学館・小田切進『日本近代文学大事典 第三巻』講談社, 389-390.
- 桑原桃音, 2013 a, 「大正期における近代的結婚観の受容層——『讀賣新聞』「身の上相談」欄の結婚問題相談者の分析」『ソシオロジ』177: 71-88.
- 桑原桃音, 2013 b, 「大正期における配偶者選択に関する歴史社会学的研究——『讀賣新聞』「身の上相談」欄にみる葛藤の分析」龍谷大学大学院社会学研究科 2013 年度博士論文 (<http://hdl.handle.net/10519/5332>).
- 紅野敏郎, 1977, 「安成二郎」日本近代文学館・小田切進『日本近代文学大事典』講談社, 392.
- 斎藤美穂, 1996, 「I 婦人雑誌の諸相 婦人雑誌における身の上相談——大正期を中心に」近代女性文化史研究会著『大正期の女性雑誌』大空社, 55-87.
- 坂本龍彦, 1990, 「望月百合子」『朝日人物事典(現代日本)』朝日新聞社, 1617.
- 佐々木雅発, 1977, 「前田晃」日本近代文学館・小田切進『日本近代文学大事典 第二巻』講談社, 216.
- 佐々木満子, 1991, 「松本雲舟」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書(65)』昭和女子大学近代文化研究所, 119-170.
- 自由学人 羽仁吉一 編集委員会, 2006, 『自由学人 羽仁吉一』自由学園出版局.
- 新聞及新聞記者社, [1922] 1988, 「新聞及新聞記者」『新聞人名辞典』1988, 日本図書センター.
- 新聞販売百年史刊行委員会, 1969, 『新聞販売百年史』日本新聞販売協会.
- 武田房子, 1995, 『水野仙子——理知の母親なる私の心』ドメス出版.
- 昭和女子大学近代文学研究室, 1983, 「田村俊子」『近代文学研究叢書 55 巻』昭和女子大学近代文化研究所, 208-221.
- 武川忠一, 1968, 「窪田空穂年譜」窪田空穂『窪田空穂全集別冊—窪田空穂資料集』角川書店, 347-414.
- 竹村民郎, 2004, 『大正文化 帝国のユートピア——世界史の転換期と大衆消費社会の形成』三元社.
- 鶴見俊輔, 1956, 「身上相談について」思想の科学研究会編『身上相談』河出書房, 6-51.
- 戸田房子, 1986, 『詩人の妻 生田花世』新潮社, 61-62.
- 永代静雄, 1927, 「全国新聞通信社社員名鑑」新聞研究所。(復刻: 1988 『新聞人名事典 第2巻』日本図書センター.)

- 永代静雄, 1930, 『昭和新聞名家録』新聞研究所。(復刻: 1988『新聞人名辞典 第1巻』日本図書センター。)
- 永嶺重敏, 1997, 『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部。
- 永嶺重敏, 2004, 『〈読書国民〉の誕生—明治30年代の活字メディアと読書文化』日本エディタースクール出版部。
- 中村幸, 1989, 『婦人ジャーナリスト 小橋三四子——『婦人週報』を中心に』近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社, 335-362。
- 中山元, 2008, 『賢者と羊飼い——フーコーとパレシア』筑摩書房。
- 羽島知之編著, 1997, 『写真・絵画集成新聞の歴史2——激動期の新聞』日本図書センター。
- 伴悦, 1977, 『大月隆仗』日本近代文学館・小田切進『日本近代文学大事典』講談社, 267。
- 土方正巳, 1991, 『都新聞史』日本図書センター。
- 日地谷=キルシュネライト, イルメラ, 1996, 『自然主義から私小説へ』久保田淳, 栗坪良樹, 野山嘉正, 日野龍夫, 藤井貞和編『岩波講座日本文学史——二〇世紀の文学』岩波書店: 93-118。
- 広田栄太郎, 2001, 『窪田空穂』白井勝美・高村直助, ・鳥海靖, ・由井正臣編『日本近現代人名事典』吉川弘文館, 376-377。
- 村岡嘉子, 2001, 『与謝野晶子』らいてう研究会『青鞥人物事典』大修館書店, 188-189。
- 村崎凡人, 1954, 『評伝窪田空穂』長谷川書房。
- 森秀夫, 1984, 『日本教育制度史』学芸図書。
- 森冬峰, 1990, 『恩田和子』朝日新聞社編『「現代日本」朝日人物事典』朝日新聞社, 423。
- 安成二郎, 1972, 『花万朶』同成社。
- 安譜靖子, 2001, 『五明倭文子——辛口の行動派』「水野仙子」らいてう研究会『「青鞥」人物事典——110人の群像』大修館書店, 94, 158-159。
- 柳敬助・八重夫妻展, 1996, 『共に歩んだ肖像画家と女性編集者』日本女子大学成瀬記念館。
- 柳田泉, 1957, 『小説——明治時代』早稲田大学75周年記念出版委員会『日本の近代文藝と早稲田大学』理想社, 114。
- 山内太郎編, 1972, 『学校制度 戦後日本の教育改革 第5巻』東京大学出版会。
- 山口美代子・折井美耶子・石井紀子・近現代日本女性人名事典編集委員会編, 2001, 『近現代日本女性人名事典』ドメス出版。
- 山崎眞紀子, 2005, 『田村俊子の世界——作品と言説空間の変容』彩流社, 323-331。
- 山本武利, 1981, 『近代日本の新聞読者層』法政大学出版会。
- 山本文雄, 1948, 『日本新聞史』国際出版。
- 山本文雄, [1970] 1992, 『明治時代後期』, 『大正時代』山本文雄編著, 『日本マス・コミュニケーション史 [増補]』東京大学出版会, 51-144。
- 山本友一, 1977, 『松村英一』日本近代文学館・小田切進『日本近代文学大事典 第三巻』講談社, 250-251。
- 吉岡真美, 2001, 『田村俊子』らいてう研究会『「青鞥」人物事典——110人の群像』大修館書店, 122-123。
- 米田佐代子, 2001, 『生田花世——自己にこだわり続けた女性』らいてう研究会『「青鞥」人物事典——110人の群像』大修館書店, 36-37。
- 讀賣新聞社編, 1955, 『讀賣新聞八十年史』読売新聞社。
- 読売新聞社編, 1994, 『読売新聞百二十年史』読売新聞社。
- 読売新聞100年史編纂委員会, 1976, 『読売新聞100年史』読売新聞社。
- 読売新聞社社史編集室編, 1987, 『読売新聞発展史』読売新聞社。
- 和田謹吾, [1966] 1983, 『自然主義文学 (増補版)』文泉堂出版。
- 和田艶子, [1971] 1995, 『鎮魂—生田花世の生涯』大空社。